

検査機精密バルブ2000種

健康や環境問題に関心が集まる中、検査・分析装置の要となる小型部品を製造・販売し、業界トップクラスになった。

電流を通すと磁力でバルブ（弁）が開閉し、気体や液体の出入りを調節する電磁弁だ。水質、排ガスなどの測定装置のほか、血液検査装置や人工透析機などにも使われている。

電磁弁の大きさはわずか数センチ。必要なものを必要だけ正確に流す膜を作る技術には定評がある。もっとも薄いタイプで0・15ミリだ。1ミリ以下の膜を削る刀物も自分たちでつくっている。

社長の浅井直也さん（44）は、大学卒業後、マスコミ業

高砂電気工業

界で仕事をしていた。しかし、創業者で父親の博二さんに「会社に来て欲しい」と頼まれ、92年に入社した。父親は電気関係の技術者だったが、浅井さんは法学部出身の文系。全くの畑違いだったが、「仕事を覚えるなら早いほうがいいだろう」と決断した。すぐに担当したのは工作機械部門。機械の操作は意外と楽しかったが、一日中立ったままの作業が続いた。数学は得意ではなかったが、やがてコンピューターを使った設計もできるようになった。

博二さんは02年5月に亡くなったが、早くから電磁石の可能性に着目した業界の草分け的な存在だった。当初は、ファスナー製造機や除雪する

電磁弁、バイオに不可欠



電磁弁の組み立てや検査をするクリーンルームに立つ浅井さん＝名古屋市緑区の本社工場で

ラッセル車向けに大型の電磁石を納入していた。70年代ごろから分析装置向けの電磁弁にも応用し、本格生産を始めたという。いまでは扱っている電磁弁

は約2千種類にも及ぶ。設計から製造まで一貫して行う。お客様の個々のニーズに合わせ

後はずっと黒字が続いている。主力の一つの血液分析装置向けは、安全性を重視するために、高機能と精密さが要求され、価格競争が起きにくいことがある。厚生労働省が安全確保のために簡単には設計変更を認めない傾向が強いという。20年ほど前に設計した電磁弁を今でも納入している機械もある。

遺伝子の配列をつきとめたり、たんぱく質を合成したりする生命工学機器など最新のバイオテクノロジーにも電磁弁は欠かせない。ただ、将来性や収益性の高さに目をつけて、数年前から大企業が新規参入するようになった。

「安穩としていられる状況ではなくなった」と浅井さん。大きな海外未開拓市場に目を向ける。米国、英国、ドイツ、スウェーデンなど海外への輸出に力を入れ、02年からはコストを削減するために中国の工場で生産を始めた。海外向けの受注は順調に伸びているが、浅井さんは「バルブ技術を生かし、新しい収益の柱になる製品を開発することが最大の課題です」。